



1988-3

No.234

【表紙】

友禅訪問着・桂垣

森口華弘  
昭和47年作

・解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

## 特集：演劇の動向

昭和62年度芸術祭の演劇	日下令光	4
現代劇の現状と動向	岩波 剛	6
歌舞伎の現状と課題	水落 潔	8
演劇の国際交流	倉橋 健	10
繁栄期の多様化 演劇—この十年	藤田 洋	12
真の演劇交流を	杉本了三	14

### 都道府県のページ

我が県の文化行政②		
個性豊かな地域文化の創造	神奈川県	15
特色ある博物館・美術館紹介⑥		
ふるさとの心を伝える		
四国村	(財)四国民家博物館	18
第3回国民文化祭ひょうご88事業概要		20
都道府県月間行事予定 3月		21

### 文化行政質問箱

文化財保護⑥ 重要文化財の譲渡手続は？	22
著作権⑨ コンピュータ・プログラムの保護措置は？	23

### 文化庁だより

文化庁ニュース	
・昭和63年度文化庁予算案の概要	24
・国立劇場研修生募集について	25
図書紹介／「教育改革の推進—現状と課題—」 (教育改革白書)について	27
❖昭和62年度 文化庁月報 総目次	28

・文化庁行事報告及び予定	30
・国立劇場ニュース	31

# 演劇の国際交流

早稲田大学教授 倉橋 健



戦後四十年余の間に数多くの劇団がわが国を訪れたが、印象に残るのは、すぐれた演出家や名優による名舞台である。梅蘭芳の「霸王別姫」「貴妃醉酒」、モスクワ芸術座の「三人姉妹」「桜の園」、コメディ・フランセーズの「ブリタニクス」、スカパンの悪だくみ、テアトル・ド・フランス（ジャン・ルイ・バロ―一座）の「クリストファ・コロム」、ミラノ・ピッコロ座の「二人の主人を一度に持つと」、ロイヤル・シェイクスピア劇団の「冬物語」「真夏の夜の夢」、レニングラード・ポリショイ・ドラマ劇場の「ワーニャ伯父さん」、ある馬の物語、北京人民芸術劇院の「茶館」、上海人民芸術劇院の「家」、江蘇省昆劇院の「牡丹亭」「朱買臣休妻」などである。最近はミュージカルの来演も多いが、「マイ・ワン・アンド・オンリー」（「わたしのただ一人のひと」）をのぞけばあまり高い評価をあたえられないのは、

ツアーのために編成されたロード・カンパニーだからである。「マイ・ワン・アンド・オンリー」だけは、プロードウェイとおなじく、振付・演出のトミー・チューンがみずからサンデイ・ダンカンと共に主演していた。やはり最高の演目を持ってこなければ、観客の心はつかめない。

もう十年も前になるであろうか、日米演劇会議が東京と大阪で開かれたとき、日本の観客は前述したようなすぐれた舞台に接しているのだから、アメリカの地方のレパトリー劇団がプロードウェイの出し物を持ってやってきても、あまり見にくい気になれないし、したがって真の国際交流にはならないのだと意見を述べたところ、カフエ・ラ・ママ実験劇場のエレン・スチュアート女史がしきりに同感の意を表してくれた。しかしこれは、すでに三年目にはいりつつある、現在の日米舞台芸術の交流のありようにも、自戒の言葉としてかえってくる。

日米文化教育交流会議（カルコン）の提唱で、文化庁と日米舞台芸術交流事業実行委員会の主催、国際交流基金の後援によって、音楽、舞踊、演劇の三分野にわたり現代日本の舞台芸術をアメリカに紹介する試みが始まったのは、一九八六年である。演劇に関しては、一昨年は蜷川幸雄演出の「王女メデア」、昨年は鈴木忠志演出の「王妃クリテムネストラ」と井上ひさし作「木村光」演出の「化粧」がえらばれた。

劇の上演には、照明や装置などの人員が必要である。「化粧」は渡辺美佐子の一人芝居であるが、それでも日本から八人のスタッフが必要であった。したがって文化庁や国際交流

基金の援助だけでは費用はとてまかないきれないから、制作者の側でスポンサーを見つけてなければならぬ。「王女メデア」のような大がかりなものになると、スポンサーが主催者の観を呈することにもなりかねない。まあ、それでもいいのであるが、この状態がそのまま進むと、内容や質には目をつぶり、スポンサーつきのものしか送りだせなくなるおそれさえある。

たとえば清水邦夫の「楽屋」や「タンゴ・冬の終わりに」、別役実の「サラダ殺人事件」や「諸国を遍歴する二人の騎士の物語」、安部公房の「棒になった男」など、ぜひとも紹介したいところだが、まず誰がどうやって

制作するかという問題がある。しかもその上で制作者に、「自分たちでなんとかスポンサーを」などといえるものではない。結局、先だつ資金を確保しながら、三年さきぐらいたまを見通して企画をたてていかなければ、せっかくな交流事業もその場かぎりの、実りうすいものになる危険がある。かの地の好劇家に、こんどは何がくるのだろうかという期待を抱かせるようないきかたが望ましい。

実の子を捨てた女座長の狂気を描いた「化粧」は、一昨年バリーで上演したときと同じく、字幕（今回は英語）を舞台の上部に映したため、アメリカの観客にもよく理解かれ、好評であった。西海岸での公演の批評には、「リア王」と対比したものが多かったが、ニューヨークのジャパン・ソサエティのリラ・アシュソン・ウォレス劇場（客席二百七十九）で共に見た友人の演劇学者は、チェーホフの「白鳥の歌」と、ベケットの「クラップの最後のテープ」と、ジョン・オズボーンの「芸人」などの近代劇作術を吸収した上で、日本の伝統的生活感情と芸の様式性を展開した舞台などではないかと指摘し、作者の着想に感心していた。

渡辺美佐子の演技ほどの新聞も激賞していたが、彼女がメイキヤップをして醜の母を求める股旅の伊三郎に扮していく過程で、化粧が厚くなるにしたがってきしむように少しず

つ内部から崩壊していくものがあってもよいのではないかと鋭い意見が、せりふを解さないうちから断言はできないがとの留保つきながら、ニューヨークでは聞かれた。どこへ行っても、きちんと見るべきところを見ている人間はいるのである。こういう人達を満足させたとき、はじめて演劇の国際交流が実をむすぶといえるだろう。

これまで日本にきた外国の劇団はいずれもレパトリー制度を確立しており、そのなかから極めつけの演目を持って来演している。ロングランもないし、これがあれば、公演が終わった時点で外国におくりだすことも可能である、といってレパトリー制もとっていない日本の劇団の場合、最高の作品を最高の配役でということ、なかなか実現しがたい。考えられるのは、芸術祭の主催公演や、あるいは移動芸術祭の演目をそのまま持つていくことであるが、そのためには文化庁がキヤステイニングその他制作面にかなりタッチしなければならぬ。当然費用の問題もからんでくるだろうし、劇団側がそれを受けいれるかどうかもわからない。

むずかしさばかり目立つ演劇の国際交流ではあるが、試行錯誤をつづけるうちに、いざれ道がひらけてくるだろう。いや、そうなることを願っている。

編 集 後 記

文化庁のエレベーターホールに銀閣寺模型に替わり、国宝長寿寺本堂(滋賀県甲賀郡石部町)の十分の一模型が展示されました。これは文化財公開活用と記録保存技術の解明を目的に二か年かけて製作されたもので、二十七棟目になります。来庁の折は是非ごらんください。

昭和六十三年度の文化庁予算の政府案をご報告していますが、予算額の語呂合わせが職員の間で募集され、皆「ハッピーに笑となれや」(三七、八二三、一七八千円)が長官賞に入賞しました。

今号は昭和六十二年度の締めくくりになります。昨年の四月号から、読者の皆様の幅広い関心に応えられるよう構成・内容を改め、誌面の充実を努めてまいりましたが、この一年間のご感想はいかがでしょうか。御意見をお聞かせください。(K)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課  
TEL(03)2681-2141(代表)

「文化庁月報」三月号

(通巻第三三四号)  
昭和63年3月25日印刷・発行

編集文化庁

〒100東京都千代田区神田3丁目2番2号

発行所 株式会社 きょうせい

本社 〒104東京都中央区銀座7丁目4番12号

営業所 〒106東京都新宿区西五軒町55番地

電話 (03)2681-2141(代表)

振替口座 東京 九一六一番

印刷所 ㈱行政学会印刷所

定価 一八〇円(送料四五百円)  
年間購読料 二、一六〇円(送料共)